
予想の斜め上に行く

G M S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予想の斜め上を行く

【コード】

N8802W

【作者名】

GMS

【あらすじ】

この小説の主人公は作者が書いている転生物語の主人公と同名ですが異世界の魂の大本が似た存在であり同一人物ではありません。

そして原作の知識はアニメで得たものがほとんどなので原作の完全なるブレイク、及び他者の二次小説を参考に自分なりの解釈で書く可能性があります。それでもかまわない方はどうぞお楽しみください。

第0話 欲望爆発

Side???

俺は今とてもカオスな状況の中心にいる。

目の前に土下座する爺

その隣には爺の頭を棒探偵事務所の所長のごとくスリッパで頭をたたく絶世の美女「笑」

「今の笑ってなんですか」

「いやなんとなく、二次小説っぽく」

「あ、そうですね」

こんなことになったのはちょっとした出来事が原因だった

回想開始

えっとここどこ

周りが真っ白だしまさかとは思っけどお決まり二次小説展開？

「その通りです」

絶世の美女とエンカウントした

「ありがとう、絶世の美女なんて（テレ）」

読心術？

しかも自分にデメリットなし、さらに不死、年齢制御可能
そのうえ時空間移動能力所持、さらに体は真祖の吸血鬼、しかも
朝に弱くない

ついでにはすべての世界のものを 王の財宝（ゲート・オブ・
バビロン）におもに漫画を入れておいてくれ
身体能力は自分に不利なるもの以外E？」

髪と女神は啞然としている

「おぬし」「あなた」

「欲張りすぎよ」「じゃ」「」

「人を間違えて殺したのによく言うねえ」

「く、わかったわ、まさかほかに条件はないわよね？」

「えっと随時幻所を100冊補充状態で」

「わかったはその程度なら（さっきに比べりゃましね）」

「で、転生先は」

「リリカルなのはの世界じゃあそこでは」「何をふざけたこと
言ってるんだあ」「くは」

回想終了

とゆう感じだ

「そういえば、あなたと同じような魂を持つ人間が遊戯王GXの世

界に行つてたから

時空移動するならあつてみるのも一興かもね」

「わかりました

ではそろそろ送ってください」

「わかつたはところでデバイスは？」

「あ忘れてた、追加注文しますよ

インテリジェントデバイスを二つ、ユニオンデバイスを一つ

インテリジェントデバイスの一つ目はゼルダの伝説のトライフォース型名前はトライブレイブ

愛称はトライ

基本体内にいて、任意で外に出せ、痣はリンクのように手の甲に

1stモードはマスターソード型、能力は退魔

2ndモードは弓型、能力は超遠距離攻撃

二つ目は待機状態は指輪型、デザインは社長の嫁、名称はブルーサモナー

愛称はブルー

形態は1stモードはデュエルディスク

2ndモードはバトルナイザー、3rdモードはクロスローダー

ユニオンデバイスはあなたのような美しい女性型で名前はアテナ」

「美しいだなんて、わかつたはあと

言つておくけど、記憶を取り戻すのは5歳になったとき
それまでは能力全てにリミッターをかけておいておくわ

あと、おまけであなたは高町家の近所に家があるわよ」

「ありがとう

あなたは心まできれいですね

「その爺と違って」

「ありがとう、じゃ、今度こそ行くわよ
汝に幸あれ、石崎遊輝」

俺の意識はブラックアウトした

第1話 目覚める力

Side 遊輝

5歳の誕生日の日の夢の中

「お久しぶりですね」

「誰ですか」

目の前には美人さんがいる

「美人とは嬉しいですね
では早速いきますか」

え、と思ったその瞬間僕、否俺は全てを思い出した

「お久しぶりですね
前回聞けなかったのでお聞きしますがお名前は？」

とりあえず丁寧な口調で

「名前はリーゼです
では説明は無用ですね
デバイスは枕元に置いておきますので起きたら確認しておいてくだ
さい」

そこまで言われ俺の意識は暗転した

そして次の日

「なのちゃん、今日は何して遊ぶ」

「じゃあ、ケーキ屋さんごっこ」

わかっていると思うがなのちゃんというのは

この物語の主人公 高町なのは

将来の管理局の白い悪魔のことである

って俺は誰に説明してるんだ？

ま、とにかく昼間はこんな感じでほほえましく過ごした

で、問題の夜

俺は自分の部屋の認識阻害 + 認識改竄 + 人よけの結界を張っている

そんでゲート・オブ・バビロンからダイオラマ魔法球を出していた

これはエヴァの持っている別荘と同じ代物だ

要は1時間が1日になる

そして俺は中に入りさらに同じものを出した

これで1時間が24日だ

そしてもう1度同じことをしたようは1時間 \equiv 24時間 \times 24時間

\times 24時間 \equiv 516日？だ

この間に俺がやれることは多い

だがまずおれがやることは副葬処女^{ペリアルドール}ではない方法で動くアスラ・マ

キーナへの魔改造

これの動力はもうすでに決めている

幻書だ、あれは一つ一つがとんでもない魔力の塊だ

災厄のつえ、あれも幻書をたきつけにし力を得ている

改造の仕方をアンサートーカーやらラジエルの書やらを使い調べな

がら魔改造した

そして67日と22時間くらいをかけて全てのアスラマキーナの改造に成功した
詳しい内容は割愛する

「って私たちの話はなしですか」

「そうですねよマスター
いくらなのちゃんに欲情して、自分の自慢をすることしか考えてないといえひどいですよ」

「俺はなのちゃんに欲情などしてないし
自分の自慢のことしか考えてないわけだはない
なにをいつているんだブルー」

この明らかにおかしなことを言っている名はブルーサモナー
通称ブルーだ

「変な紹介しないでよ
私は事実を言っているだけよマスター」

「マスターに失礼だろ
マスターはロリコンではない、私たちのマスターはある程度成長したら
自分と同じ不老不死にしてハーレムにするという野望を持つ狡猾な
変態なのですよ」

このおれを守るのか攻めるのかどっちをしたいんだと突っ込みを入
れたい奴は

トライブレイブ通称トライだ
なぜこんな性格なんだ ジーザス神は死んだと最初言ってしまった

俺は決して悪くないと思う

「お前らはいいい加減にしろ
少し黙らないとお前ら 弄るぞ」

「ハ、ハイワカリマシタ」

「わかればよろしい
では模擬戦だ

敵を出してくれまずは改造の終わったアスラ・マキーナの確認だ」

「はい、敵のレベルはいつも通り管理局ランクB魔道士
人数は25人でいきます」

「わかった
では早速、来い？鉄、白銀、鋼」

俺は3体のアスラ・マキーナを呼ぶそれと同時に3冊の本を目の前
の何もない空間から引つ張り出す

「時空間移動は便利だな」

「闇より暗き深淵より出でし 其は、科学の光が落とす影！」
「闇より深き深淵より出でし 其は、科学の幻影を裁く剣！」
「闇より深き融炉より出でし 其は、科学の鎚が鍛えし玉鋼」

3体のアスラ・マキーナが俺の影から現れた
俺はそいつらに向かい本を投げる

「「「カトリッジセット
幻書装鎮

アスラ・マキーナ起動」「」

そう俺が投げたのは3冊の幻書

火蜥蜴の刻印の書を？鐵に

慧者の石板を白銀に

カイロスの断代史を鋼に装鎮し起動させた

？鐵は燃えている

「どうやら幻書の能力の付加に成功したようだ」

「そのようですねマスター」

「そうですねマスター」

「まずは？鐵行け」

そうゆうと？鐵は重力球を作り出す

これだけ聞くと普通に感じるかもしれない

だが普通と違うのは、重力球が赤黒いところだ

そのまま重力球は放たれる

敵に重力球が当たった後そこから炎が広がったそしてその炎が残っていた敵をすべて殲滅した

「さすがだな

アスラ・マキーナと幻書の組み合わせは正解だったみたいだ

じゃあ次は白銀に向けて魔法を打たせる

ブルー、ランクS魔道士を3人出せ」

「分かりましたマスター」

3体の人形が現れる

その人形が魔砲を放ってきた

「白銀、剣をふれ」

その一言に反応した白銀は剣を一閃
そこに開いた空間の穴、そこに近づいた魔法は消える

「慧者の石板の能力も引き出せてる
本来の白銀ではあの攻撃全ては消せなかっただろうな」

「はい、おそらくマスターの言うとおりです」

「最後だ鋼」

俺がそうだった瞬間3体の人形は壊れていた

「カイロスの断代史の効果も出たようだ
違う時間に入り込むというのは恐ろしいな」

慧者^{えいじゃ}の石板の能力はまやかしを無効にする
カイロスの断代史の効果は時を操る
まさに能力が出ている

「本来は読まないと出せない幻書の力
その魔力とともに能力を強制的に引き出させる
しかも本来の力以上の能力で
これは恐ろしい物を作ってしまったな
だが俺はその斜め上に行く
よしブルー、トライアスラ・マキーナのユニゾンシステムの作成を
急ぐぞ」

2つのインテリジェントデバイスはまるで俺に従う騎士のように
または、軍の敬礼のように答える

「イエス・マイ・マスター」

第1話 目覚める力(後書き)

火蜥蜴の刻印の書・出典 ダンタリアンの書架
慧者の石板・上に同じ

カイロスの断代史・上に同じ

? 鐵・出典 アスラクライン

白銀・上に同じ

鋼・上に同じ

ゲート・オブ・バビロン・フェイトシリーズ

ダイオラマ魔法球・ネギま

認識阻害 + 認識改竄 + 人よけの結果・各種上と同じ

第2話 Dの開発/作られしオリジナルメモリ(前書き)

前回のユニゾンシステムはまだ当分出ません

第2話 Dの開発/作られしオリジナルメモリ

Side 遊輝

「ねえ、遊君かわいいなのお」

あの時間をすべて使ってもあれの開発はしきれなかった
そして次の日翠屋に来たんだが
何故こうなった

「ほんと遊君、にあうわねえ
これきてみて」

「桃子さん、次着せるのはこのメイド服ですよ」

ここにきて気づいたことだが
俺のかあさんは性格があつた、あの桃子さんと全く同じだ
しかもなぜか、顔が思いつきり俺が男の娘といわれるほど女顔
だから、女装させられている

「桃子さん、お母さん

もうやめて（涙目+上目遣い）」

「「ブホ」」

二人は愛を流しながら倒れた

Side auto

S i d eなのは

あのかわいさは反則なの
私よりもかわいいなの
っってお母さんたちが鼻血を流して倒れたなの

「ゆうくん、お母さんたちが倒れたなの
救急車呼ばないとなの」

「大丈夫だよ
なのちゃん、そのうち生き返るから
それより早く逃げよう」

逃げるってなんで
ゆうくんの女装かわいかったからもっと見てたかったのに

海鳴公園

私たちはブランコにのったりして遊んだの
夕方まで遊んだの

「じゃあそろそろ戻ろうか」

「わかったなの」

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

なのはと翠屋に帰った後恭也さん、基シスコンにケンカを売られた

「貴様、なのはを誑かして
ここで消す」

「何故そうなる
いつ俺がなのはを誑かした」

「今の貴様を見れば誰だってそう思う、なぜ、恋人つなぎで手を組
んでる」

あ、さっきの不良を瞬動で消してからこのままだったの忘れてた

「「アラアラ、カップル成立」「」

桃子さん、お母さんも何を言っている
この状況で

「こうなったら、遊輝、俺と勝負だ」

「不意打ちしといてそれかよ」

どうしてこうなったんだ

あの後士郎さんによって「だったら道場に案内しよう」とかノリノ
リで言われながら拉致られた

で、俺は日本刀のような木刀を取り構えている
そして、人間とは思えない殺気で黒く染まった二刀流のシスコンと
向かい合っていた

「御神真刀流・小太刀二刀術、高町恭也。参る！」

俺も名乗るか

じゃあとりあえずあれで行くか

「退魔の使い手

神鳴流 石崎遊輝参る」

「では、はじめ」

消えた、いきなり神速か
ならこつちも

「瞬動」

シスコンが見えた

「おそい

神鳴流奥義 斬魔剣・弍の太刀」

「な、木刀が」

二人の動きは止まり

俺は後ろからシスコンの首に剣をあてていた

そしてシスコンの手にあった木刀は柄の部分を残し輪切りになっていた
いた

「チエックメイトです
シスコン」

「な、いつの間に」

「「「ゆうくん、強い（なの）」「」」

「じゃあ、帰っていいですよね
お母さん、先に家に帰っているね」

「待て

何故貴様はそんなに強いんだ」

俺は無視し帰った

S i d e a u t o

S i d e 恭也

なぜ、俺はあんな奴に俺は強くなる
強くなるんだ

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

よし、作るか

「何を作るんですかマスター」

「トライか

ダブルドライバーの強化発展型と新ガイアメモリを25個だ」

「ガイアメモリ多すぎじゃないマスター」

「まあそうゆうな、ブルー」

これがあれば、楽ができるんだし

お前らも手伝えこれは強い味方になる」

「分かりました（わかったわ）マイ・マスター」

266日と7時間位後

「できた、トリプルドライバーができた」

そこにあるのは上に向かって挿入口出しきものが3つある赤いベル
トだ

それに謎の薬品

そしてたくさんのメモリ

一つはタカの絵が描かれたTと刻まれた赤いメモリ

一つはクジャクの絵が描かれたKと刻まれた赤いメモリ

一つはコンドルの絵が描かれたKと刻まれた赤いメモリ

一つはライオンの絵が描かれたRと刻まれた黄色いメモリ

一つはトラの絵が描かれたTと刻まれた黄色いメモリ

一つはチーターの絵が描かれたTと刻まれた黄色いメモリ

一つはクワガタの絵が描かれたKと刻まれた緑色のメモリ

一つはカマキリの絵が描かれたKと刻まれた緑色のメモリ

一つはバッタの絵が描かれたBと刻まれた緑色のメモリ

一つはサイの絵が描かれたSと刻まれた白いメモリ

一つはゴリラの絵が描かれたGと刻まれた白いメモリ
一つはゾウの絵が描かれたZと刻まれた白いメモリ
一つはシャチの絵が描かれたSと刻まれた青いメモリ
一つはウナギの絵が描かれたUと刻まれた青いメモリ
一つはタコの絵が描かれたTと刻まれた青いメモリ
一つはプテラノドンの絵が描かれたPと刻まれた紫色のメモリ
一つはトリケラトプスの絵が描かれたTと刻まれた紫色のメモリ
一つはティラノザウルスの絵が描かれたTと刻まれた紫色のメモリ
一つはコブラの絵が描かれたKと刻まれたオレンジ色のメモリ
一つはカメの絵が描かれたKと刻まれたオレンジ色のメモリ
一つはワニの絵が描かれたWと刻まれたオレンジ色のメモリ
一つは鬼の絵が描かれたIと刻まれた黒色のメモリ
一つはタカとその下にDCDと描かれたSと刻まれた黒いメモリ
一つはGと刻まれた金色のメモリ
そしてひととき目立つ機械鳥
またの名をトリプルエクストリームメモリ

「これってマスター」

「マスターこれは」

「〇〇〇のメモリですか」

「そうだ、疑似〇〇〇に変身できる

そしてこのGはゴールドメモリ

これとサイクロン、ジョーカー、そしてこのトリプルエクストリームメモリを使うことで

疑似的なサイクロンジョーカーゴールドエクストリームになれる」

「成程、さすがマスターです

〇〇〇のメモリの強化もエクストリームでできるとゆうことですね」

「そのとおりだトライ
じゃあ試験をする、ブルースクラスを5人出してくれ」

「了解マスター
早速出したわよ」

「じゃあ行くか」

俺は腰にトリプルドライバーをまいた
そして、ガイアウイスパーを鳴らした

「タカ」「クジャク」「コンドル」

音ははつきり言って〇〇〇と同じだ
そしてタカとコンドルをまず両脇にはめる
そして次に真ん中にクジャクメモリをはめる

「タカ、クジャク、コンドル
タアジャアドルウー」

ここも再現しました

「「もろ〇〇〇じゃないですかマスター」」

見た目は確かに〇〇〇だ
だがベルト以外にも違うところはある

「それは少し違う
タジャスピナーをしてみる」

「え、あ、ほんとだ
メダルを入れるところがなくて代わりに周りに7つのマキシマムス
ロットが
まさか」「

「じゃあさっそく試すぞ
心配するな、暴走しない」

そういつて俺は7本のメモリを取り出した
そして、それをタジャスピナーへ挿入する

「ジョーカーマキシマムドライブ
メタルマキシマムドライブ
トリガーマキシマムドライブ
サイクロンマキシマムドライブ
ヒートマキシマムドライブ
ルナマキシマムドライブ
プリズムマキシマムドライブ」

7本のマキシマム
セブンスマキシマムを放つ

「マグナマキシマムキャノン」

あ

これは
使用禁止だな

「マスター」

「これは」

「うん」

ピンチの時以外使用禁止決定」

目の前には100メートルくらい先まで
半径50メートルくらいえぐれた地面があった

「マスターこんな空中で」

「地面に向けて打つたら」

「地形変わりますよ」

「そうだな、とゆうか敵消滅するぞ
ま、いいや次試すぞ」

「「はい、マスター」」

デバイスたちも引いてる
これは要改良だな

「次はどうするかな」

第2話 Dの開発/作られしオリジナルメモリ(後書き)

ガイアメモリ・出典 仮面ライダーW

トリプルドライバー・上記を魔改造

一部ガイアメモリ・出典 仮面ライダーOOO

神鳴流奥義 斬魔剣・弐の太刀・出典 ネギま
瞬動・上に同じ

第3話 Dの開発/現れる謎の敵(前書き)

ついに戦闘です

第3話 Dの開発/現れる謎の敵

Side 遊輝

いったいどうしてこうなった。

士郎さんにけがをさせたそしきにのりこんだら、まさか俺が来たため起きたイレギュラーか？
まあいいまずはメモリブレイクだ

「さあ、お前の罪を数えろ」

数時間前

俺はあの後いくつかのメモリの開発をした
その後、自分の能力を調べていたある日のこと

「ゆうくん、大変

士郎さんが誰かに襲われてけがをしたって」

「え、今どこにいるの

士郎さんは大丈夫なの？」

「大けがで命の危機だった

いま海鳴病院だから早く行くわよ」

冷静に話しているようだが俺と母さんはかなり焦っている

海鳴病院にいくとなのちゃんが泣き

シスコンが殺気を立て

桃子さんが心配していた

そうしてしばらくたちみんなは家に帰って行った

その帰って行った原因は医者の方の山は去ったという一言と

あまりの心配で倒れてしまった桃子さん

そして、復讐をしようとしているのか殺気で黒くなり

怒り狂っていたシスコンが怖くて泣いてしまったとなのちゃんが原因
だった

1時間後

「土郎さん、今回復させます」

俺は手を前に出す

「ベホイミ」

その後、土郎さんは緑の光に包まれた

少しすると意識が戻り俺に話しかけてきた

「つく、ここはどこだ

きみは遊輝君、いったい僕に何が起きたんだい」

「あなたは襲われてすごいきげがをしたんです

少しは僕が直しましたが、それでも絶対安静です」

「直したって

それより恭也たちはどうしているんだ」

「なのちゃんは復讐に燃えているのかわかりませんが
鬼のような顔で修練している恭也さんを怖がっていました
桃子さんは心配で朝倒れて今は家で寝ています」

「成程、大体分かったよ。

で、君は何しに来たんだい

ただ、僕を直しに来たわけじゃないんだろ」

「はい、明日僕となのちゃんの二人でくるんで

なのちゃんを励ましてもらえませんか

恭也さんとかがあんな状況で肩身が狭い思いをしているんです
そのあとあなたを僕が直します」

「君が直すって何をするきだい？

君に医療の知識があるように見えないけど」

「魔法です」

「魔法だって、そんなものが」

「信じるか信じないかはあなたが決めてください
ただしほかの人には他言無用でお願いします」

「ああ、わかった」

少し疑っているようだったが大丈夫だろう
これで、なのちゃんは大丈夫だろう

S i d e a u t o

S i d e 恭也

くそ、力がほしい
父さんを襲った組織をつぶせるだけの力が
あの遊輝とかいうやつをつぶす力が

「力がほしい」

「力がほしいのですか」

「誰だ」

何者だ

このセールスマンのような恰好をした奴は

「あなたに力を差し上げましょう」

奴はポケットからUSBメモリのようなものを取り出した

「ソード」

奴はそれを俺に向けて投げてきた

「ぐわああああー」

俺はそこで気を失った

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

「ブルー、トライ
士郎さんを襲ったやつらをつぶすぞ
居場所は分かるか」

「もちろんよマスター」

「すぐそこに案内しろ」

そして数10分後

「ここか」

「イエスマスター」

「はいるぞ「ドカーン」なに」

目の前が急に爆発しそこにいたのは意識を失ったいかつい男と1体の異形だった

「マスターあれは」

「ドーパントです」

「なんだと」

「ブルー実体化だ」

実体化?と思っっている人に説明しておく

前話でメモリとドライバーと一緒に置いてあった怪しい薬
あれは、触れたデバイスを実体化、いや人間化させる薬だ
まあ、トライとブルー以外がふれると壊れちゃうけど

「OK、マスター」

そういつて俺はトリプルドライバーを腰に巻く

俺は紫色のメモリと金色のメモリを取り出す

青髪青眼の少女、ブルーは緑色のメモリを取り出しその腰には俺の
腰に巻かれているのと同じベルトがある

「サイクロン」

ブルーが緑色のメモリのガイアウイスパーを鳴らしトリプルドライ
バーの右端にメモリを入れる

「ジョーカー」「ゴールド」

俺は紫色のメモリと金色のメモリのガイアウイスパーを鳴らし
紫のメモリを左端へ、金色のメモリを真ん中に入れる

「キヤアアオ」

そこにエクストリームよりひとときわ大きいトリプルエクストリーム
メモリが来る

ブルーを吸収し俺のところまで来ると

トリプルドライバーと合体した

俺はエクストリームの羽の部分をつかみ合体したトリプルドライバ
ーの両端を広げる

そしてトリプルドライバーはダブルドライバーに真ん中にメモリス

ロットを追加したような形になり
エクストリームが広がった

「「変身」」

「サイクロンジョーカーゴールドエクストリーム」

そう、あの二色の騎士最強フォームになったのだ
右は緑、左は紫、真ん中は金、顔は？の形になり両肩にはWの形を
した突起がついている

「「さあお前の罪を数えろ」」

そう言った瞬間敵は襲ってきた

「マスター、敵の情報は閲覧完了したわよ
あれは、ソードローパント
能力は無数の剣を操ること」

「わかった、だがそんなの関係ない一撃で終わらす」

俺はプリズムビッカーをだす

そして、4つのメモリをビッカーシールドにさす

「サイクロンマキシマムドライブ

ヒートマキシマムドライブ

ルナマキシマムドライブ

ジョーカーマキシマムドライブ」

「「ビッカーファイナリユージョン」」

ビッカーシールドから虹色の光が出てきてソードドーパントにあたる
そして爆発を起こした

その爆発が止んだ時俺たちの目の前にいたのは

「シスコン？」

そうあのシスコンだった

とりあえずおれたちは変身を解除した後警察に電話をし

シスコンを連れて翠屋にいった

その後、桃子さんとなのちゃんへ

シスコンが怪しかったからついていったら謎の怪しい集団と戦い始
めて最後の一人を倒したところで倒れたとゆう話をした

桃子さんは信じてなかったが、まあいいだろう

それにしても、誰がガイアメモリを？

そして時は急速に動き出す

第3話 Dの開発/現れる謎の敵(後書き)

ベホイミ・出典 ドラクエ

ソードメモリ・出典 仮面ライダーW

次回から無印です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802w/>

予想の斜め上を行く

2011年11月12日12時06分発行